

努力点

- (1)一人ひとりの生きる力を育む指導の充実
- ・主体性を引き出す指導・支援と評価の工夫
 - ・各教科の資質・能力を育成するための教育課程の検討
- (2)安心安全に学べる学校環境づくりと、実践的な安全教育の強化
- ・教職員一人ひとりの高い危機管理意識及び人権意識の保持
 - ・安全教育(生活安全、交通安全、災害安全)の充実
- (3)保護者や地域との連携・協働による信頼される学校づくりの推進
- ・保護者や地域への積極的な情報発信
 - ・地域の力を活用した教育活動の充実

評価基準： A達成できた B概ね達成できた Cあまり達成できていない D達成できていない

学部・分掌部	評価項目(具体的な取組目標)	努力点項目	評価の観点	取組状況等(中間報告)
小学部	生活単元学習において生活科の理科につながる内容を充実させ、児童が「できた、分かった」と実感できる授業を実践する。	1	・児童が理科的な事象に興味関心をもって取り組める活動を提供することができたか。 ・児童がイメージしやすいまとまりのある単元構成となっていたか。	・概ね、生活科の理科につながる内容に焦点を当てて、授業の見直しを行うことができていた。児童が興味関心をもって学習できるよう、体験的な活動を取り入れるなど、内容を検討したり、理解につながるように工夫をした授業実践をしたりすることができた。 ・単元の構成については、さらに実践を行った上で、検証する。
中学部	生活単元学習において理科に関する指導を充実させ、生徒が「できた、分かった」と実感できる授業を実践する。	1	・生活と関連した具体的な活動に生徒が意欲的に取り組み、その中で自然と理科に関する知識や技能を身に付ける授業を行うことができたか。	・生活単元学習の中で理科的な視点を意識し、いくつかの単元において理科に関する指導を積極的に取り入れた。これに伴い、学習内容の一部を変更し、日なたと日かげの気温差の学習や、虫の飼育などを行った。生徒の実態に即した指導を行うことで理科的な内容への興味や関心が高まり、体験を伴う活動を通じて生徒が自然現象に対する理解を深め「できた、分かった」という実感を持てる場面が見られている。今後も生活と結びついた具体的な活動を通して生徒の主体的な学びを引き出し、理科的な知識や技能の習得につながる授業づくりを継続していく。
高等部	〃	1	・「なぜ、どうして？」と疑問をもったり、「きっと～ではないか」と結果を予想したりするなど、活動を通して生徒が理科的な思考を深める授業を行うことができたか。	・実験の中で生徒が試行しながら主体的に活動する様子が見られたり、予想を立てて自分なりに考えたりすることができていた。また、生徒同士で話し合ったり結果を確かめ合ったりしながら学習することができていた。 ・観察記録を通し、自分たちで違いに気付いたり、比較ができていたりするよう支援していく。 ・「何がどうなったか」を確認する言葉掛けを行いながら授業を行った。結果の後に「なぜそうなったのか」まで考察できるようにしたり、生活につながる学びが得られたりするよう授業内容を工夫していく。
教務部	保護者や地域との連携・協働による信頼される学校づくりを目指して、学校ホームページ等による分かりやすい情報発信の工夫に努める。	3	・個人情報の保護に留意しつつ、写真を適切に活用して学校行事や各学部の活動の様子などを発信することができたか。 ・ホームページのカテゴリーやレイアウトなどをリニューアルし、保護者や地域の方に分かりやすく、効果的な情報発信を行うことができたか。	・各学年ごとにホームページの担当時期を割り振ったり、定期的に学部だよりを発行したりするなど、積極的に活動の様子を発信できた。また、個人が特定できる写真でも条件を満たせば公開可能としたことで、子どもたちの活動の様子をより分かりやすく発信できるようになった。 ・ホームページのリニューアルを実施。トップページのレイアウトの工夫や、リンク、バナーの設置などを行い、全体的に見やすく、機能的になるよう調整した。リニューアル後は、職員や保護者からフィードバックを行い、改善点をホームページに反映させていけるとよい。
学習指導部	生活単元学習において、各教科の指導を充実させ、児童生徒の主体性を引き出す授業を実践するために、単元におけるPDCAサイクルを実施する流れを構築する。	1	・授業前に単元展開計画を作成し、授業に関わる教員で共有することで、共通理解を図って授業を行うことができたか。 ・授業実施後に、授業に関わった教員で授業の反省を行うことができたか。	・年度初めに単元展開計画の活用について周知したことで、授業前に内容について共有してから授業を行ったり、実施後に反省を回覧して振り返ったりすることができた。 ・計画の周知が授業の直前になってしまうことがあったため、余裕をもって周知できるようにしていく。

児童生徒指導部	児童生徒が安心・安全に学べる学校環境作りのため、安全教育の充実やよりよい人間関係を構築できる児童生徒指導の充実に取り組む。	2	・交通安全や社会的マナーの向上、児童心得や生徒心得、生徒規則の励行に努め、外部機関と連携しながら、児童生徒指導の充実を図ることができたか。 ・関係機関や地域の協力を得ながら、スクールバスの適切な運行および登下校の安全確保など危機管理意識をもって業務に当たることができたか。	・各学部において児童生徒の実態に応じて、交通安全教室や防犯教室を実施し、交通ルール遵守や自分の身を守る行動など、指導の充実にも努めることができた。また、実際に警察官から分かりやすく説明や指導をいただき、有効であった。 ・関係機関の協力を得ながら、安全なスクールバスの運行にも努めることができた。また、中高生の自力通学については、登下校の安全について、現地に行き、生徒の実態に応じて指導を行うことができた。
進路指導部	生徒及び保護者が、期待感をもって主体的な進路選択ができるよう支援するために、情報提供や進路相談機能をより一層充実させるとともに、教員各自の進路指導に関する意識定着を図る。	3	・進路関係行事の内容や、ホームページ等での情報提供を充実させることができたか。 ・保護者、生徒からの相談に対して具体的な助言を行い、進路選択に良い影響があったか。 ・夏季休業中の社会体験研修に、各学部教員の半数以上の参加があったか。	・夏季休業中の福祉施設説明会には延べ130名超の参加があった。次年度のスムーズな開催に向けて、計画等を精査する。 ・8月末時点で、9件の進路相談を実施した。福祉サービスや企業就労に関する情報提供及び生徒情報の共有を行うことができた。 ・社会体験研修の参加者について、中学部が目標数値を超えた。より一層の参加率向上を目指し、募集の方法等を見直す。
健康指導部	児童生徒が安全に過ごせる環境を整え、安心して心身ともに健康に成長できるよう、安全教育を実践し、命を大切に作る意識を育む。	2	・学習環境における安全管理の徹底、及び保健指導や食育における共通理解を図り、課題の改善に努めることができたか。 ・「自分の命は自分で守る」を基に、自ら考えて行動できる防災安全教育の実践を行うことができたか。	・ブールの安全管理において、細かな監視方法を加え職員へ周知し無事故で終了することができた。熱中症対策は、各教室の暑さ指数計と指数カードの活用を伝え、場合によっては学習活動の変更を促している。給食の配膳量をホームページで知らせたり対象学年による給食試食会を開催したりして、食育に関する啓発を図った。 ・地震・火災・竜巻における避難訓練では、シェイクアウト訓練やだんごむしのポーズ等、自ら身を守る行動が定着しつつあり、避難も落ち着いて移動することができている。職員研修において、消火栓の使用法や消火器の所在確認を行い、火災時の初期対応に関する意識を高めることができた。
相談支援部	特別支援学校のセンター的機能として、保護者や地域関係機関への情報提供や相談支援の充実を図る。	3	・地域のニーズに応じた公開研修を実施し、支援方法や教材の紹介等を行うことができたか。 ・学校公開を実施し、特別支援学校の教育について情報を提供することができたか。	・地域の小中学校等を対象とした夏季休業中の公開研修では、要望の多かった「自立活動」をテーマに講話とグループワークの研修を実施することができた。約50名の参加者があり、アンケートには、「役に立った」「参考になった」等の意見がたくさんあった。 ・10月に放課後等デイサービス向けの学校公開を実施する予定。
渉外部	保護者間・地域とのつながりを大切に、保護者・各団体と連携し、円滑な活動の推進に努める。	3	・保護者等と協力して、活動の充実に努めることができたか。 ・活動等における情報の積極的な発信に努めることができたか。	・保護者（役員等を中心に）や各団体等と連携しながら各活動を実施している。 ・研修会等の案内は一斉メールなどで、保護者や教職員に情報を発信している。 ・各団体からのセミナー等の案内については、同じような内容のものは、精選して発信していくようにする。今後も研修会等の案内の発信を継続し、PTAや各団体の活動においても案内や様子をホームページなどで発信していく。
特別活動部	地域や異学年などの様々な人との関わりの中で、児童生徒の自尊感情や自己有用感を高められるような活動の充実に努める。	3	・集会やMYタイムなどで異学年交流を計画し、工夫して実施することができたか。 ・交流学習やボランティア受け入れなど、地域の方々と関わる場面を計画し、共通理解をもって実施することができたか。	・MYタイムのグループ活動において異学年同士のグループを組んだり、集会で他学部の児童生徒とペアを組んだりして、交流する場を設定した。大会に向けての強化練習で生徒同士励まし合ったり、あいさつ運動に取り組む生徒が称賛されたりして、自己有用感が高まる機会となった。 ・交流で実態表を作成して相手校と共通理解を図った。ボランティアスクールで障害の理解を促した。